

明治初年の国立銀行紙幣をめぐる菊池容斎と石井鼎湖

—『前賢故実』を手がかりとして—

東野治之

一 はじめに

一般に近現代の紙幣は、直接間接に国家の權威を背景として発行されるところから、その図案にも、発行当時の政治理念の反映されることが少なくない。その状況一斑は、神功皇后や聖徳太子の肖像入り紙幣を例に、かつて述べたことがあった¹⁾。その場合、図案がどのようにして考案され、原画が何に拠って、いかに描かれたかを知ることができれば、さらに考察を深められることは言うまでもない。また明治初期の紙幣となれば、西洋画の技法で描かれた原画は、本格の絵画ではないものの、洋風画の受容を考える手がかりにもなるはずである。しかし、これらの点については、多くの場合、確実な史料がなく、あまり関心が持たれていないのが実情である。

その中であつて珍しく、明治初年にアメリカの印刷会社に発注された国立銀行一円紙幣に関し、原画作者の名を伝える史料がある。ここにそれを紹介し、若干の私見を記してみたい。

二 国立銀行紙幣と菊池容斎

問題の史料は、長年に亘り東京美術学校の校長を勤め、美術行政に大きな影響力を持っていた正木直彦氏の日記中にある。それは次のようなものである。

十二月十三日（昭和十三年） 晴（中略）午後四時、通信大臣官邸に開かれたる郵便切手図案調査会に出席（中略）右了て晚餐あり、（中略）席上、印刷局（校訂注 原文数字空白）博士の談に、我邦の紙幣は、太政官・民部省札の後に、明治四年か五年かと思ふ、アメリカの Continental Bank Note Co. に依頼して作りたるものにて、図様は蒙古襲来、田道真守の絵にて、菊池容斎の筆に成れるものなり。次に双龍文の紙幣は、ゼルマン紙幣と云はる、ものにて、明治五年に独乙に委嘱したるものにて、Bern Hard Dondorf 会社に托したり。此時、印刷後には、其機械全部を買受の約束条件付なりしを以て、之を買受けて、印刷局の前身紙幣寮にて紙幣を作ること、なりたり。此時、技師の必要あるにより、ドンドルフに従事したる技師キヨソネの、月給八百両にて招聘したるなり。キヨソネは以太利人なりしも、本国にては機を得さりしを以て、独乙に客遊し居たるなりと

いふ。

〔正木直彦『十三松堂日記』四、中央公論美術出版、一九六六年〕

この記述に現れる印刷局の某博士は、おそらく印刷学の草分けとして知られた矢野道也氏であろう²。矢野氏は、前年から開かれた郵便切手図案調査会の委員に印刷局技師として参加していた³。最終の会となった当日の議事録に発言は見られないが、出席していたと見て不自然ではない。この時、印刷局からは、やはり技師の山上謙一氏が加わっていたが、この場合、工学博士の学位を有した古参の矢野氏がふさわしいことは言うまでもなからう。

正木氏が聞いた話は、その内容の全てが未知のものではない。ゼルマン紙幣（ゲルマン紙幣）と呼ばれた明治通宝札がドイツのドンドルフ・ナウマン社に発注して印刷されたこと、その時ドンドルフ・ナウマン社に勤務していたE・キヨツソーネがお雇い外人として招聘され、紙幣の国産印刷に尽力したことなどは、よく知られた事実である。もともと、明治通宝札の印刷を委託する契約が結ばれたのは、明治五年ではなく明治三年のことである⁴。またキヨツソーネを「月給八百両にて招聘」（一両は一円の意⁵）というのは正しくなく、明治八年に行なわれた最初の契約では、月給四五四円余りであった⁶。確認はできないが、「月給八百両」は彼の後年の俸給を伝えている可能性が高い。さらにキヨツソーネが、「本国にては機を得ざりしを以て」ドイツに来ていたというのは、今日の研究結果からは認められず、紙幣製作の技術を習得する熱意に燃えてのドイツ行きであったことが明らかにされている⁷。

このように多少の訂正は必要としても、大筋で事実が語られている中で、これまで未言及のこととして注目されるのが、アメリカに発注された紙幣に関するくだりである。ここで取り上げられている紙幣は、明治六年に発行された国立銀行紙幣の旧札を指す。

明治新政府は、王政復古の当初、財政上の理由から太政官札や民部省札を発行して急場をしのいだ⁸が、これらの紙幣は形態が江戸時代以来の縦型であったのみならず、印刷も在来の銅版彫刻であったところから、偽造紙幣の頻出に悩まされることとなった。そこで政府は、明治五年に国立銀行条例を施行して、発券機能を持った国立銀行の設立を各地に認めるに先立ち、精巧な紙幣の発行を企図し、各国立銀行に共通する新紙幣の印刷を、アメリカ・ニューヨークのコンチネンタル・バンクノート・カンパニーに委託したのであった⁹。後に国立銀行紙幣の国産化が図られた結果、明治十年以降、キヨツソーネ図案の新紙幣が出たため、それらの紙幣は旧国立銀行紙幣と呼ばれる。その券種は一円・二円・五円・十円・二十円の五種であった。国立銀行紙幣は、明治四年に発行を見た本位金貨との兌換をうたっていたので、本位金貨の額面ごとに券種が定まっていた。

この五種の紙幣は、寸法が共通で、デザインも似通ったものが採用された（図1～5）。即ち表面は中央上部に「大日本帝国通用紙幣」の文字を入れ、その下には、この紙幣が法的根拠に基づく兌換紙幣であることを、縦書きに上下に分けて記す。紙幣の左右両端には、日本の歴史、神話、風俗に基づく絵画が配せられている。一方裏面上部には、この紙幣が全ての支払いに有効であることを述べた文言を、下部には偽造禁止の文言を、それぞれ縦書きとし、左右両端に額面相当の本位金貨の図を載せて、中央に大きく歴史、神話、風俗にちなむ絵画が入れられる。こうした紙幣の様式は、アメリカの国立銀行紙幣（図6）に酷似し、それを範をとったものであることが指摘されている。なお以上の文字・図様はアメリカで刷られ、それを輸入して、国内で銀行名・地名・頭取名・支配人名・印章・番号などが加刷された。今、公的記録を参考に、各紙幣の絵画主題を挙げれば、次のとおりである¹⁰。



图2 貳円



图1 壹円



图 4 拾元



图 3 五元



図 6 アメリカ国立銀行10ドル紙幣



図 5 式拾円



図7 一円紙幣の人物

一円紙幣 (表右) 奥羽地方で戦う田道 (表左) 兵船 (裏) 蒙古襲来
 二円紙幣 (表右) 稲村ヶ崎の新田義貞 (表左) 船上山の児島高德
 (裏) 宮城(旧江戸城)の門と櫓
 五円紙幣 (表右) 田植風景 (表左) 稲刈風景
 (裏) 日本橋から富士山を望む風景
 十円紙幣 (表左右) 雅楽演奏風景
 (裏) 神功皇后の三韓征伐
 二十円紙幣 (表右) 斐伊川の畔のスサノオノミコト (表左) 八岐大蛇
 (裏) オオクニヌシノミコトの国譲り

十円紙幣の雅楽演奏風景については、天の岩戸開きという説もあるが、これに関しては後にふれる。さてこの内、矢野氏の言にみえるのは、表裏の順は逆であるものの、一円紙幣の図柄に相当するであろう。矢野氏の発言の後半部分を検討した先の結果からすると、これも頭から信用するのは問題かもしれない。

少なくともその内容には、次の二つの問題がある。まず第一は、表面右の人物(図7)を「田道真守」としている点である。タジマモリは記紀にみえる伝説上の人物で、垂仁朝に常世国に使いし、非時香東(橘)を持ち帰ったとされる(垂仁紀九十年二月条など)。しかしこの絵に見られるような、武将としての活躍は伝えられていない。これはやはり、公文書の記載に従って、田道と見るべきで、「田道真守」は、名前の類似から来た記憶の誤りと考えられる。この田道もまた『日本書紀』に見える人物である。同書の仁徳天皇五十三年五月と五十五年の条に、次のような記事がある。

五十三年、新羅不朝貢。夏五月、遣上毛野君祖竹葉瀬、令問其闕貢。是道路之間獲白鹿、乃還之獻于天皇、更改日而行。俄且重遣竹葉瀬之弟田道。則詔之曰、若新羅距者、挙兵撃之。仍授精兵。新羅起兵而距之。爰新羅人日々挑戦、田道固塞而不出。時新羅軍卒一人、有放于管外。則掠俘之、因問消息。对曰、有強力者、曰百衝。輕捷猛幹、每為軍右前鋒。故伺之擊左則敗也。時新羅空左備右。於是田道連精騎擊其左。新羅軍潰之。因縱兵、乘之殺數百人、即虜四邑之人民以歸焉。

五十五年、蝦夷叛之。遣田道令擊。則為蝦夷所敗、以死于伊寺水門。時有従者、取得田道之手纏、与其妻。乃抱手纏而縊死。時人聞之流涕。是後蝦夷亦襲之略人民。因以掘田道墓。則有大蛇。發瞋目自墓出以咋。蝦夷悉被蛇毒、而多死亡、唯二人得免耳。故時人云、田道雖既亡、遂報讎。何死人之無知耶。

これによると田道は、上毛野氏の祖、竹葉瀬の弟で、新羅に遠征して武勲を立てたが、のちに蝦夷が反乱を起こした時、攻められて伊寺の水門で敗死した。

その後、蝦夷がもう一度襲ってきて、田道の墓を発いたところ、怒った大蛇が現れて多くの蝦夷を噛み、毒死させて復讐を果たしたという。因みにその墓碑と伝えるものが、石巻市の禅昌寺にあり、江戸時代から知られているが、もとより信を置くに足りない。田道については『古事記』に記事がなく、同じく仁徳紀にしか出ない両面宿禰と同様、実態は不明である。それ以外の情報としては、『新撰姓氏録』（河内皇別）に、百済の国に遣わされ、そこで残した子孫が欽明朝に來日、止美連の姓を賜ったとあるが、直接事績内容には結びつかない。しかしいずれにしても、書紀に描かれた人物像からすると、紙幣の人物が田道であることは確実であろう。

第二の問題点は、その田道や蒙古襲来の絵が、菊池容齋によって描かれたとあることである。このことは管見の限り他に所見がなく、最も注目すべき発言であることは言うまでもない。次に節を改めて検証することとしよう。



図8 田道像（『前賢故実』より）

三 『前賢故実』との関係

一円紙幣の図様が菊池容齋の筆になるとするのは、果たして事実であろうか。それを証明する文献史料は見当たらないが、重要な手がかりが、菊池容齋の著作『前賢故実』に見出される¹⁾。同書は容齋が、童蒙の教育に資するため、上古から南北朝時代に至る歴史の中で、忠孝の観点から範とすべき人物を抽出し、その姿を絵で示し解説を付したものである。天保七年（一八三六）に完成したが、刊行されたのは慶応四年（一八六八）であった。全十巻から成る。その巻之一には、仁徳天皇朝から三名の人物が採られているが、内一人が田道である。その図を挿図に示す（図8）。

背景は全く描かれないが、この図が一円紙幣の田道像と密接に関わることは一目瞭然であろう。全体の姿勢が共通することは言うまでもないが、細部では鎧の上半身部分の形制がよく一致しており、弓も処々に節を描く点が類似する。異なるのは、草摺や杵の細部と、両足の先が土坡に隠れる点であるが、これらは原画にない細部を更に描き込んだものといってよい。また紙幣では左腰に帯剣があるが、『前賢故実』の方では鞘のみが見え、剣身は折れて左足元に横たわる。紙幣は足元を描かない代わりに、剣を帯びさせて形を整えたのである。何より両図の親近性を物語るのは、左腰に突き立った二本の矢である。紙幣ではより目立たない形になっているが、『前賢故実』の図を参照すると、それが戦闘の激しさを表す役割を持っていることが知られるであろう。

このように比較してみると、少なくとも田道像を菊池容齋の筆とする発言が、全く荒唐無稽なものでないことがわかる。この像の原画は、『前賢故実』の田道像にあると言って差し支えない。菊池容齋は明治十一年に九十一歳で没するが、その点だけから言えば、容齋が紙幣の原画に筆を執ったこともありえないことではない。しかし、そのように結論するのは、やはり早計であろう。ここ

で考えてみなければならぬのは、容齋との関係が明らかなのは田道像に限られ、その他の兵船や蒙古襲来図については、現状では関係がたどれないことである。紙幣の蒙古襲来図と、容齋の描いた同主題の日本画¹²を比べても、共通点を見出すのは困難である。各紙幣を通じて画風の共通性が強いので、あるいは全て同一筆者か、同一人の主導の下に描かれた可能性を否定できないが、新田義貞や児島高德の場合は、『前賢故実』との関係は全く見出せない。しかもそれにもまして重要なのは、そもそも容齋が、明治の新政府に出仕したり、その仕事を請負ったりした形跡がないことである。また、紙幣の図様が日本画の技法でなく、陰影を付け、遠近感を出す洋画の技法で描かれていることもうなずけない。確かに容齋は、晩年、西洋画の技法も試みてはいるが、紙幣に見るように複雑な絵は、容齋のような日本画を本筋とする画家の、能くするところではなかったであろう。こうみてみると、一円紙幣の図様が菊池容齋の筆になつたとする矢野氏の発言は、そのまま事実と認めることは困難で、田道像が容齋の『前賢故実』に基づくというだけに改められるべきである。

それでは、原画を描いたのは誰であったのか。先述のとおり画風は似通っているだけで、全てにわたって指導的役割を演じた画家がいたはずである。直接の史料がない以上、もとより推測の域を出るものではないが、このついでに、その画家について見通しを述べておきたい。そのためには、国立銀行紙幣の発注経過を今少し立ち入ってみておく必要がある。公的な記録によると、アメリカへの紙幣印刷発注は、明治三年に渡米した伊藤博文の意見に端を発する。在米中の伊藤の建議を受けた大蔵省は、翌年四月、太政官に図案や製造額を伺い出した。太政官の裁可を経て、コンチネンタル・バンクノート・カンパニーと契約が結ばれたのは、九月である。この時すでに紙幣の図様の下絵は送られていて、宮城、三韓征伐、天の岩戸開き、蒙古襲来、楠公迎撃などの図様があったらしい。日本銀行調査局の『図録日本の貨幣』7(三一四頁)は、この間の事

情を次のように述べている。

紙幣図柄の下絵は、早くからアメリカへ送付してあったが、三韓征伐と天の岩戸開きのほかは粗雑であったので再送付の依頼があった。アメリカ在留中の中島信行からは、わが国古来の英雄豪傑の肖像が偽造防止上、有効であるとの連絡があったけれども、技術的に優れたものがなかったので、画工に命じ蒙古襲来覆没および楠公迎撃の図ほか数種の古画六、七枚を模写させて、アメリカへ送った。この古画採用は初期のアメリカ銀行券と同種のものであり、このほか全券種が縦二寸七分、横六寸三分の同寸法、着色は欄綠色、図画を薄墨色にした同一様式で、アメリカ国法銀行券に類似のものとなった。

図様の内、宮城、三韓征伐、蒙古襲来は言を要さない。ただ、この時点で発行が決まっていたのは、一円・五円・十円・二十円の四種で、二円紙幣の発行が正式に決まり、追加発注されたのは、翌明治五年五月であった。従ってなお図様の入替え等、多少の変更があった可能性はある。例えば楠公迎撃は、相当する図様が見られない。二円紙幣の児島高德の図は無関係ではないが、これを楠公迎撃図というのは到底無理であろう。やや後に石版画の作例で楠公迎撃図が見られるが、全く異なっている¹³。天の岩戸開きは十円紙幣の雅楽演奏図を指したものとも考えられるが、それにしてもわずかに描かれた背景が、全くそれらしくはない。これも石版画で流布した図様とは異なっていて、別案に換えられたであろう

ともあれ、ここで確認しておきたいのは、紙幣の図案の下絵は、以上の経過からして、明治四年にはおおむね整えられていたことである。修正や差替を考慮しても、明治五年の前半には完成していた。即ち原画の描き手は、明治四



図9 石井鼎湖 弘安四年豊元兵於筑海図



図10 一円紙幣の蒙古襲来図

年の早い段階で西洋画をある程度マスターしており、しかも大蔵省の仕事を請けるだけ、当局に近い立場の人物であったと見なければならぬ。この条件に当てはまる人物として想起されるのは、本来日本画家であった石井鼎湖（名は重賢、一八四八年～一八九七年）である¹⁵。

石井鼎湖は、明治三年十月に大蔵省の度量衡改正掛に出仕した。同四年、度量衡改正掛は記録寮の下に入り、同寮で昇任した鼎湖は、明治五年と七年の二回に亘って紙幣寮に出張し、七年の出張の際、紙幣寮への転任を希望して認められ、その後身である印刷局を明治二十八年に退官するまで、そこで活躍する。これまで鼎湖は、紙幣寮、印刷局における石版技術の導入と発展に尽力した人

物として注目されてきた¹⁶。しかし注意すべきは、鼎湖が大蔵省における履歴の初期に職務としたのは、画図を描くことであり、改正掛長洪沢栄一（のち紙幣寮頭）のもとで第一国立銀行の画（木版）を描いたり、紙幣寮への出張では、五年に新旧公債証書の下図を描き、七年に秩禄公債証書の下図を描いたりしていることであろう。現存する公債証書は歴史画をデザインしたもので、画風は和洋折衷である¹⁷。明治三年ごろ西洋画を描けた人物の中で、鼎湖には本格的な油彩画などはないため、さほど著名ではないが、紙幣図案の下絵作成となれば、その官歴からいって、鼎湖以外の人物は想定しにくいと言うべきである。明治八年頃、石版で刊行された、鼎湖の原画による蒙古襲来図（弘安四年豊元兵於筑海図」、図9）があるが、図様は同一でないにせよ、その構図や作風は一円紙幣の蒙古襲来図（図10）に酷似すると言っても過言ではなからう。

四 おわりに

正木直彦氏の日記に見える矢野道也氏の発言から出発して、国立銀行旧紙幣の原画とその筆者について考えてみた。その結果、一円紙幣の田道像は、菊池容斎の『前賢故実』に基づくが、容斎の筆になったとは考えられず、それを洋画の技法で書き改めた下絵画家が別にいること、その人物はおそらく他の額面の紙幣の下図作成にも関わったと見られ、当時大蔵省に勤めていた石井鼎湖の可能性が濃厚であるとの結論に達した。その点、矢野氏の言は事実そのものを伝えてはおらず修正を要するが、決して無意味ではない。

まずそれは国立銀行紙幣の図様のイデオロギッシュな性格を考える上に有益である。旧紙幣の図案全体を通じて、対外遠征、外敵の克服、蝦夷の討伐、勤皇といった主題が目立つが、田道像が採られた『前賢故実』は、先述のとおり、忠孝を顕彰する意味を持った著作であった。幕末期以降、ナシヨナリズムの高

揚の中で、この書物が人気を博したことは、それが明治三十六年七月に一括して復刻されたことにも窺える（翻刻発行者は桜井庄吉）。また、明治期の歴史画にとつて、『前賢故実』が一種の種本として機能したことは、夙に指摘されているとおりである。¹⁹⁾ こうした図案の採用には、ナシヨナリズムの流布を図る政府の意図が底流にあったと理解されよう。

第二の意義として、明治初年の洋風画研究に貴重な一石を投ずる点²⁰⁾が、注目に値する。そもそも明治初年の洋風画に関しては、近年、銅版画や石版画の分野から意欲的な研究が多く現れ、油彩や水彩などの作例からは究明できなかつた新たな動向が明らかにされている。しかし、紙幣の図案が正面から取り上げられることは、従来なかつた。オリジナルな作品とはいえないまでも、挿絵・切手・政府刊行物などが脚光を浴びる中、紙幣図案の検討が放置されてよいとは思われない。特に本稿で問題とした国立銀行の旧紙幣は、その下絵の作成年代が明治三年～五年に限定され、しかも洋風画の特徴がよく出た作例である。洋風画とはいえ、蒙古襲来や三韓征伐のように、あたかも西欧の歴史画風のものがある一方、日本橋から富士を望む景のように、幕末の松田玄々堂や岡田春燈齋らの微塵銅版画²¹⁾を思わせる画風のものもある。まさに過渡期の様相を表しており、その内、歴史的画風は、明治十年代以降の各種歴史画に継承されていったと見てよいであろう。小稿が機縁となつて、この方面の研究が進展することを願つてやまない。

注

- (1) 拙著『貨幣の日本史』（朝日選書、一九九七年）、拙稿「紙幣の聖徳太子」（『史学雑誌』一一八編九号、二〇〇九年）。
- (2) 大蔵省印刷局編『矢野道也伝記並論文集』一九五六年。
- (3) 日本郵趣出版制作『昭和切手発行資料集』郵趣サービス社、一九八一年。

(4) 「エドアルト・キヨッソーネ関連年譜」（明治美術学会・印刷局朝陽会編「お雇い外国人キヨッソーネ研究」所収）。

(5) 注1前掲拙著二四二頁参照。

(6) 注4に同じ。

(7) リア・ベレッタ「キヨッソーネとイタリア王国国立銀行」（注4前掲書）。

(8) 日本銀行調査局編『図録日本の貨幣』7（東洋経済新報社、一九七三年）三四頁。

(9) 同右三一六頁、表五―二四。同書は一円紙幣の表の図に關し、備考欄において「法規分類大全」の説明を否定し、伊豆大島で工藤茂光の軍勢を迎え撃つ源為朝を描いたものとするが、根拠が挙げられておらずにわかに従えない。

(10) 石巻市史編さん委員会編『石巻の歴史』八、資料編2、古代・中世編（一九九二年、石巻市）一―三頁所載。狩谷椋齋は、その著『古京遺文』の目録で、「後人為託」の一例に「田道碑」を挙げる。なおこの碑の存在については、かつて平川南氏より教示を受けた。

(11) 菊池容齋については、佐藤道信『河鍋曉齋と菊池容齋』（日本の美術三二五号、至文堂、一九九三年）参照。

(12) 同右、第一六四参照。

(13) 神戸市立博物館編『描かれた明治ニッポン』研究編（描かれた明治ニッポン展実行委員会、二〇〇二年）二六五頁。

(14) 同右、二五〇頁。

(15) 石井鼎湖については、益井邦夫「クロモ石版の創始者 石井重賢の事蹟考」（『国学院大学紀要』二六号、一九八八年）参照。

(16) 森登『《石画試験》から《玉堂富貴》へ』（注13前掲書）。

(17) 同右一五頁及び大蔵省印刷局編『印刷局沿革録』明治四十年、三四頁参照。

(18) 河野実・森登・大島寛子編『描かれた明治ニッポン』石版画（リトグラフ）の時代（『展図録』）描かれた明治ニッポン展実行委員会・毎日新聞社、二〇〇二年）四〇五。

(19) 山梨俊夫「描かれた歴史」―明治のなかの「歴史画」の位置（兵庫県立近代美術館・神奈川県立近代美術館編『描かれた歴史』、一九九三年）。

(20) たとえば、町田市立国際版画美術館（河野美・高木幸枝）編『版画 80年の軌跡―明治初年から昭和20年まで』（一九九六年）、注13前掲書など。

(21) 具体的な作例は、小野忠重編『日本の銅版画と石版画』（双林社、一九四二年）、西村貞『日本銅版画志』（全国書房、一九四一年）、神奈川県立近代美術館編『玄々堂とその一派展図録』（一九九八年）など参照。

挿図出典

図1～5 瀬戸浩平監修『日本近代紙幣総覧』（株式会社ポナンザ、一九八四年）

図6 日本銀行金融研究所長編『貨幣博物館』（一九九五年改訂版）

図7・8・10 筆者撮影

図9 注17文献